

第一圖 川 原 寺 塔 址

川原寺第一次第二次調査概要

建造物研究室 建築
歴史研究室 考古

一 はじめに

大和平野土地改良導水路予定地の調査として、昭和31年度には飛鳥寺の発掘を行い、予期以上の成果をあげたが、引き続き、昭和32年度より3年計画で史跡川原寺の調査を行っている。第一次の調査は、昭和32年11月15日より翌年2月28日まで伽藍中樞部南半を対照として実施し、第二次は、昭和33年4月14日より5月18日まで塔址を調査した。

川原寺（弘福寺）の創建については諸説があり、今日の所何れともきめ難い。7世紀から8世紀にかけては、官の大寺として繁栄し、9世紀に入り、弘法大師入山後真言の一院となった。15世紀ごろには、寺は荒廃して諸方に礎石を残すのみとなったとある。その後草庵が営まれて今日にいたっている。大正6年、現本堂の前面（南方）の水田下より多数の礎石が掘り出され、一部が売却されて問題となり、こうした事情から大正10年3月、史跡に指定されている。この指定地の一部を導水路が通る予定になっているので、調査地として選んだものである。なお川原寺の南に接する大字橋小字北ノ門は、導水路墜道出口予定地となっているので、併せて調査を行った。

二 中 金 堂

現在の本堂の地には瑪瑙の礎石として著名な白大理石（奈良県吉野郡洞川産）の礎石が並んでおり、それらの配置から、もと正面5間、奥行4間の金堂があつたことが早くから注目されていた。今回の実測

調査によつて、礎石はすべて原位置に完存しており、入側列の礎石のすべてに地覆の取付痕跡があり、法隆寺金堂のように身舎の全体に低い大きな仏壇が設けられていたことなどが判明した。また現本堂の後方でしらべた結果、側柱心より基壇縁まで11尺あることがわかった。したがつて基壇全体の大きさは東西79尺、南北63尺と推定された。

四 塔

中金堂の東南、西金堂の東に従来東塔址と推定されていた塚状の地

出二位置 規模などから推してこれは、塔と相対して置かれた西金堂の遺構であろうと考えられた。

中金堂の西南方、塔址と対称の位置にある水田では、大正14年度の調査の際、建物の遺構に関連すると考えられる石敷が検出されていた。今回ふたたびこの石敷を発掘し、その連りを追跡した結果、これが東西49尺、南北72尺の長方形の区画をもつて繞っていることが判明した。石敷の幅は約5尺、その外側に2尺ばかりの溝がつくられている。また東西両辺の中央には階段痕跡が遺存している。基壇上面を甚だしくけずられ、礎石跡などとは見出せなかつたが、これらの状況から、ここに南北に細長い建物のあつたことが知られる。

第二図 川原寺発掘遺跡略図

20 50 100 尺

三 西 金 堂

盛がある。上面には17個の礎石が遺存していたが、清掃してみると礎石が区劃する外側に、凝灰岩切石の敷石が遺存していた。周囲を掘り下げた結果、一辺38尺の壇上積の基壇が見出され、その外2尺を隔てて幅2尺の雨落溝がめぐっている。基壇は東西両側に階段が設けられている。地覆には花崗岩が、羽目石、東石、葛石には凝灰岩切石が用いられている。周辺の土層の堆積状況その他から上面の礎石、敷石と

第三図 川原寺中門と南回廊東辺

共に基壇も鎌倉時代に再建されたものであることが明らかとなった。創建時の塔は、再建に際して上面を徹底的に破壊されているので心礎を除いては全く判らなかった。もとの心礎は再建時におかれた心礎の4尺下であり、ほぼ不等辺四角形の平面を示し、東西7尺、南北6尺を測る。中央には径3尺の浅い円形の柱請座を一段つくっている。心

礎には舍利孔などの施設を全く欠いている。心礎南辺中央部より約8寸南で、心礎上面と高さの均しい位置から銀銭の半欠1個と金銅製円板2枚が検出された。前者は滋賀県崇福寺心礎出土の舍利に伴った銀銭と同型同大で中央に小方孔を穿っている。金銅板も径8ばかりの貨幣状のものであるが中央に孔はみられない。

塔の構築に際しては基壇の範囲を掘り凹め、これに粘土をたたきめて壇を盛り上げた。そしてふたたびその中央部に心礎を入れる坑を西方から掘り、その上面を当時の地表とほぼ同じ高さにして心礎を据えつけ、心柱を立てた後、この坑を埋めているという状況が窺われる。創建時の礎石は再建にあたって、基壇周辺に坑をほつてこれに落し込んでいた。

五 中 門

現在の川原寺本堂の南160尺、県道より90尺北に中門址が発

第四図 川原寺西金堂西北隅と西回廊

第五図 西金堂とその下の清

六 回 廊

見された。礎石は全くなく、基壇も殆んど削られて、幅4尺の雨落石敷によつてその規模を知り得たに止まつた。間口46尺、奥行33尺で、痕跡から基壇まわりに凝灰岩の化粧を施していたと考えられる。種々の状況を綜合して中門は3間2間の建物であつたと推定している。

中門の東西両脇から

東西に連り、塔と西金堂をかこんで北に続い

ている。この回廊が中金堂に取付くか、講堂に取付いていたかは、第三次の調査を俟たねばならない。中門にとりついている南回廊は、大正6年の調査の時にその存在が確かめられていたが、今回中門の東側を発掘し、南北21尺、東西107尺の基壇に桁行、梁行ともに12.6⁶尺の16個の礎石列を検出した。東回廊は南の角から塔の東側までを掘つたが、南回廊同様の桁行、梁行であることを確めた。しかしこの部分の破壊は

徹底的になされていて現存する礎石は3個にすぎない。西回廊は大正14年の調査で礎石列が確認されていたが、西金堂との関連を確めるために発掘した。その結果西金堂址西の角より38尺西に地覆座つきの回廊礎石と、それに連続して扉軸受をもつ唐居敷の石がそれぞれ2組南北に並び、東に12尺ばかり並行して方形柱座のある礎石列があることが判明した。このことから西回廊のこの位置（中金堂前面の西側）に回廊から外に開く門が設けられていたことが推定できるようになった。回廊の内庭側には、柱心から約5尺で凝灰岩切石を用いた基壇と、玉石を敷き並べた雨落溝が良く残っており、外側基壇は玉石積の簡単なものである。なお伽藍中軸線より外側柱列まで130尺、西金堂および塔の中心まで65尺である。以上の中金堂、西金堂、塔、中門、回廊は罹災の痕跡を示している。建久2年の火災の記事がこれに当るものと思われる。

七 南 門

現在川原寺の南方を東西に走る県道は、明治末年川原寺の往年の築土垣の線に沿つてつくつたものと伝えられる。これと、現本堂への参道の交点附近から立派な造り出しのある礎石が出土し、或るものは売却され、あるものは橋寺に運びこまれている。今回の調査の結果、ここに間口30尺、奥行20尺の八脚門址と推定される遺構が出土し、北辺西側に遺存する2個の礎石が検出された。位置から見ても、これが川原寺南門址にあたることは疑ない。南門の南正面には幅10尺の石敷参道が南に走り、南方の橋寺よりを東西に走る古道（現在は水田になっている）

から、川原寺に参詣出来るようになっていたことが推定された。

八 伽藍創建前の遺構

各建物の実測終了後、地層の検討に当つて西金堂の西南隅の下層から東西約20尺に南北約10尺の矩形の石敷が見出され、この東辺から2本の溝が東に出ていることがわかつた。南側の溝は東に進んで中門北辺の中央まで連なり、ここで破壊されていた。北側の溝は東に22尺行つて東北に曲折し、更に56尺ばかり続いていることが知られた。この溝は内側が1.5尺ばかりの暗渠で、玉石を積んで築かれており、ほぼ30尺おきに6尺ばかりの長さの開渠の部分が設けられている。この溝中で、下駄、櫓などが検出された。溝は西金堂の建設によつて破壊されていることから、これが川原寺創建時以前の遺構であることは明白である。ところが、この溝は埋土の中に築かれている。そしてこの埋土の下には池、あるいは沼に堆積したと思われる青色粘土があり、この粘土中には木片や陶質土器、土師器が包含されている。この青色粘土の堆積は今回の調査地域のうち、南門址以北の全域にわたる広範囲なものである。粘土中には飛鳥時代の陶質土器や土師器が含まれているので、この上に埋土を置いたのは飛鳥時代末あるいは、その直後の時期であつたと推定される。しかも埋立地に築かれた溝を伴う遺構が、川原寺の創建によつて破壊されているのであるから、大規模な埋立と、その上に築かれた遺構は伝えられる川原宮と関係するものである可能性が強い。

九 橋寺北門

川原寺南門より南約170尺に、川原寺伽藍南北軸線上に一致して橋寺北門址が見出された。これは川原寺と橋寺の間を東西に走る古道に南接した崖上にある。調査の結果、間口3間25尺、側面2間14尺の八脚門の遺跡と考えられるものであることがわかつた。南側には雨落溝が

第六図 川原寺創建時の瓦一組

遺っており、東

西両辺では中心

部に取り付いた

幅5尺の築地基

部が検出された。

築地跡は北門か

ら東へ100尺ほど

追跡したが、こ

のような門と築

地の存在に北門

址より、橘寺の

北限が確かめら

れたことは寺地

の範囲を確認し

た点で注目され

ねばならない。

門 寺 橘 第七図

一〇、遺

物

川原寺出土遺物は、塔や溝でふれたもの以外は瓦が大部分で、他に若干の金銅金具、土師質燈明皿、瓦器片、陶磁器片、釘などがあげられる。

瓦は八葉複弁蓮華文の外縁に而違い鋸齒文を繞らした軒丸瓦と、これと対になる四重弧文軒平瓦が最も多く見出され、この一対が創建当初に用いられたことを示している。その他に各地点から平安前期から中期末にかけての種類の瓦が出土していて、伽藍がその頃までも創建時の規模を保持していたことがわかる。建久2年に羅災した後、中金堂、塔が再建されたことはこれらの遺跡附近で多量の鎌倉時代の瓦が出土することから知られる。さらに出土瓦の様式によつて、塔は室町時代までも存続し江戸時代初期以前に焼失したことを推定することが出来る。中門、南門も鎌倉以後に再建され、江戸までも小規模ながら存したもののらしい。

東回廊の南端では、従来橘寺で多く出土している埴伝と同范の埴伝破片が1個検出された。

橘寺北門址では、鎌倉、室町の瓦が多く出土してこの門が鎌倉に再建され、室町時代中頃に戦乱で焼失したことを示している。下層の古い門は平安後期の瓦が明瞭にみられる他には、複弁の奈良時代まで遡り得る軒丸瓦片が2個みられた程度で、その上限を明確にすることは困難であつた。

(坪井清足)

この北門址と築地跡は共に鎌倉時代再建のものの遺跡で、この北門址の下にはより古い門の遺跡があることが判明した。その礎石は鎌倉の再建の際すべて取除かれていたが、南辺と西辺で確めた結果、古い門の基壇の方が約1尺大きかったことが知られた。鎌倉再建前の築地も後のものと同じ位置で重つていた。古い方の門が建てられた時期の上限を知る手掛りはほとんどなかったが、少くとも平安後期を降るものではない。